

セネカ劇『ティエステス』の個のテーマは何を意味するか

はじめに

ラテン文学による英文学への影響は計り知れない。ルキウス・アンナエウス・セネカ (Lucius Annaeus Seneca, BC4-65) は古代ローマ時代のストア派の哲学者であるが、多くの悲劇、著作を記したことでも知られている。セネカの悲劇は今日伝わっているもので10篇あるが、イギリスルネサンス期の復讐悲劇に強い影響を与えたものは、『ティエステス』 (*Thyestes*)¹ である。このラテン文学をイギリス演劇に影響を与えた元の商品として再考してみるのには、英文学研究にとって有意義な事と筆者は考える。

『ティエステス』は「アトレウス」 (Atreus) による弟「ティエステス」 (Thyestes) への妻の誘惑及び王位の篡奪に対しての復讐を扱ったものであるが、この復讐の本質は個人ではなく、一般性を帯びているとする批評家が多くいる。Joe Park Poe はアトレウスの復讐の方法である食事という動物にとって基本的行動を述べ、“ Atreus’ act of treacherous violence is not viewed in the play merely as the inexplicable, cruel caprice of an individual. Seneca universalizes Atreus’ act, so to speak, and sees in it an instinct rooted in man’s very nature and common to all men ” (361) としている。そして J. J. L. Smolenaars は、『ティエステス』上演時代の実際の歴史と関連付けて、“ During the imperial age, the myth of the fratricidal struggle between Atreus and Thyestes was deemed particularly well suited to political innuendos ” (62) とし、“ Seneca’s *Thyestes* does offer interesting links to contemporary politics ” (62) と考え、政治という個人ではなく、大衆性、一般性と関連付けている。そして Mario Erasmo は、アトレウスとティエステスの復讐の物語の元になっている彼らの祖先タンタルス (Tantalus) が経験している永遠の喉の渇きという神からの罰に触れ、水と女性の存在を関連付けて “ The objects of Tantalus’ lust are metaphorically engendered to present Tantalus as lover ” (187) と述べている。つまり女性を求めるという男性の一般的行動という考えを示している。

以上、3人の批評家のように『ティエステス』の復讐物語の特徴を一般性、あるいは普遍性にあると考える意見があるのだが、筆者はそれに異を唱えたい。二人の兄弟の復讐物語が展開される以前に起こったタンタルスが経験している罰を引用してみたい。

The ghost of Tantalus

Who from the accursed regions of the dead haleth me forth, snatching at food which ever fleeth from my hungry lips? What god for his undoing showeth again to Tantalus the abodes of the living? Hath something worse been found than parching thirst midst water, worse than ever-gaping hunger? Cometh the slippery stone of Sisyphus to be borne upon my shoulders? or the wheel stretching apart my limbs in its swift round? . . . (400)

ここで説明されているのは個人の苦しみであり、個人が神から受けている辛い罰というのが印象的である。Erasmus は喉の渇きと女性への欲求という普遍性を述べていたが、私はやはりここでは、個人が経験している苦しみという印象が強いし、それゆえ普遍性よりも個人をテーマにした場面と考えた方が妥当であると考ええる。兄弟の復讐物語の元は個人というイメージが強いし、それゆえ作品全体も一般性、普遍性よりも個人をテーマにしたものではないか、という予想がたてられる。

本稿の目的は作品が個人をテーマにしたものであることを証明し、その個人のテーマがどんな意味を持ってくるか、という事を明らかにすることである。第1節では個と絶対性の関連を述べ、第2節ではアトレウスとティエステスの差異を述べて、結論で本稿の問いに答えを出してみたいと思う。

1. 個が絶対性、権力を生じる

本稿の目的は作品のテーマが個である事を証明し、その意味を考える事である。ここ第1節では絶対性、権力を生じさせる元に個の存在があり、作品のテーマにおいて個が重要である事を示すいくつか例を挙げてみる。作品の背景にある祖先タンタルスの行った事を述べる合唱隊の言葉を引用してみよう。

Chorus

[T]o Ionian ships no tale is better known. While the little son ran to his father's kiss, welcomed by sinful sword, he fell, an untimely victim at the hearth, and by the right hand was carved, O Tantalus, that thou mightest spread a banquet for the gods, thy guests. Such food eternal hunger, such eternal thirst pursues; nor for

such bestial viands could have been meted penalty more fit. (405)

幼い息子を神への食事として料理して提供したのは、タンタルス個人の罪であり、それゆえ神からの罰を受けるタンタルスを説明する合唱隊の言葉である。神の怒りという絶対性はタンタルス個人の罪が元になっている。個の行動が絶対性を生じさせている、というのが明らかである。そして作品が進行して後に兄弟が食事を通して子供を犠牲にするという筋も、このタンタルスの自分の子を犠牲にするという構造と似通っており、作品全体を通してこのタンタルスの個の行動が重要な出来事となっている。

ではタンタルスの犠牲になった息子はどうなるのであろうか。この作品の背景にあるギリシア神話によると料理されたペロプス(Pelops)はゼウスの命により、復活させられる。ペロプスは後に成人してギリシアに渡り王となり、この作品の主要人物であるアトレウスとティエステス兄弟の父となる。犠牲者である息子ペロプスは王位という権力を手に入れるのであり、やはりここでも個の犠牲が、王位という絶対性や権力と関係する元になっている。また、料理されて死んだペロプスを復活させたのも神の力という絶対性によるものであり、個の犠牲が絶対性を生じさせている。料理されて犠牲になる個としてのペロプスは、ギリシアで王位を得るという絶対性、権力に関係してくるし、そして生き返させられるということも神の力という絶対性によるものである。

そしてタンタルスの犠牲者となった息子ペロプスという個人の存在と絶対性の関連を示すのは、タンタルスの台詞にも見出すことが出来る。タンタルスは“ Now from my seed a multitude is coming up which its own race shall out-do, which shall make me seem innocent, and dare things yet undared ” (400)と語り、息子の権力の絶対性を述べている。

タンタルスの犯した罪という個の行動とそれに対する神の罰、そしてタンタルスによって料理された個の犠牲者ペロプスの手に入れる王位。どちらの場合においても個は絶対性、権力を生じさせている。個の重要性は明らかである。

さらにペロプスに継ぐ息子の王位について考えてみたい。ペロプスの畜舎には黄金の子羊が飼われている²。その子羊の所有者と王位の関係性は以下の通りである。

Atreus

His owner rules; him does the fortune of the whole house follow. Hallowed and apart he grazes in safe meadows fenced with stone, that guards the fated pasture with its rocky wall. Him did the perfidious one, daring a monstrous crime, steal away, with the partner of my bed helping the sinful deed. From this source has flowed the whole evil stream of mutual destruction; . . . (409)

子羊の所有者が王位を得るわけだがティエステスによるアトレウスの妻の誘惑によって子羊はティエステスに奪われる。この不倫による王位の篡奪は個の不貞、他人の妻の誘惑によって引き起こされたのであり、この意味でも個と権力は関係している。また子羊という動物を考えても、個体が王位と大きく関わるという意味で、個と権力の関係性を明らかにすることが出来る。

上の引用で「その神聖な羊は隔離されて、安全に草を食べており、その牧場を石が閉ざし、運命を求める牧草を岩の壁で守っている」という説明があるが、この点に関してアトレウスの妻と子羊の関係性に注目している Cedric Littlewood は“ The animal and the woman, the twin foundations of royal power have escaped their prison and the king is king no more ” (62)と述べており、捕らえられている子羊と妻の共通点を挙げている。このアトレウスという夫の管理下に置かれている妻が不倫という行動において、精神的に夫から逃げ出すこと、そして子羊が実際に飼われていた岩の壁から奪われ逃げ出すという状態は同じであり、子羊の篡奪と王位の関係性は、妻の篡奪と王位の関係性と同じである。妻という個人もやはり王位という権力、国家の絶対性に関係している。

子羊を手に入れ王位は奪ったが、現在は追放になっているティエステスというのがこの作品の状況である。ティエステスは兄アトレウスの元へ戻って、策略により我が子を食事として知らずに食べてしまうというのがこの作品の筋であるが、兄の元へ帰るティエステスの行動を Gottfried Mader は以下のように説明する。“ When for example the exiled Thyestes succumbs to the entreaties of his son, his fatal capitulation echoes, and replicates, Tantalus’ earlier acquiescence to the overpowering Fury in the prologue ” (242)。神に我が子ペロプスを食事として提供して永遠の苦しみを受けているタンタルスは作品中に出てくる唯一の女、復讐の女神フリヤ(Fury)にただ黙って

従うばかりである。そしてティエステスは息子の忠告に従い、アトレウスの元に戻りそのアトレウスの権力により、その忠告を行った息子を食べさせられる。権力に屈する個人の構図が似通っている。女神に従うタンタルス、兄の権力に屈するティエステス、その両方において個人と権力の関連性は明らかである。

これまでの説明で明らかになったのではないだろうか。神に我が子を料理として提供したタンタルスの受けている罰はタンタルス個人の罪、そのタンタルスが料理として提供したペロプスはもちろん個の犠牲、ティエステスの不倫は個人の行動、黄金の子羊とは個体。こうした事すべてが神や王位、国家という権力、絶対性に関係している。作品中にはこのように個が絶対性、権力を生じさせている構図がたくさんあり、個の重要性を説明する証拠となっている。

2. 兄アトレウスと弟ティエステス差異

この節では兄アトレウスと弟ティエステスの差異について考えてみる。この物語は王権が重要な要素となっているが、これについて兄弟の考えは大きく異なっている。王権を不倫によって篡奪した弟ティエステスであり、追放になっている彼を追い求めるアトレウスというのが筋である。まず始めにアトレウスによる王権への態度を考察してみる事にする。ティエステスを攻める意思とアトレウスの王権についての考えがわかる場面を引用してみる。

Atreus

I know the untamable spirit of the man; bent it cannot be—but it can broken.
Therefore, ere he strengthen himself or marshal his powers, we must begin the
attack, lest, while we wait, the attack be made on us. Slay or be slain will he;
between us lies the crime for him who first shall do it.

Attendant

Does public disapproval deter thee not?

Atreus

The greatest advantage this of royal power, that their master's deeds the people are
compelled as well to bear as praise. (407)

弟を破滅させるためには戦争も辞さないとするアトレウスであり、従者の反対にもかかわらず王位にあって最も好都合なのは国民が王に従う事である、とまで言うアトレウスである。しかもアトレウスが行おうとしているのは、彼自身も“ Up! My soul, do what no coming age shall approve, but none forget. I must dare some crime, atrocious, bloody, such as my brother would more wish were his ” (407)と言っているように悪行であると知っており、それを承知の上で王権の力により戦争を行使しようとしている。復讐には悪行も辞さないし、それを行う上での王権は重要な力と考えているアトレウスがわかる。王権と自身の意図が一致しているアトレウスである。

P. J. Davis はアトレウスの王権への態度について彼の情熱との関連で“ Atreus is subject to great passions as the simile at 497-503 confirms and yet control is exerted as his behaviour shows. Atreus is in fact capable of heroic self-control ” (430)と述べているが復讐の情熱と実際の行い、そしてそれに必要な英雄的支配、つまり王権は一致していると Davis は述べている。この意見は上で引用した従者とアトレウスのやり取りで示した彼の王権への態度を説明するのに議論を強化するものとなる。

後に明らかになるティエステスと違ってアトレウスは王権を恐れていない³。逆に彼にとって王権とは自分の意図を実行するのに必要な力であり、それがあからこそアトレウスはティエステスを追い詰める事が出来る。アトレウスは自身の王位という立場と意思、そして実際の行動がそれぞれ一致した論理性の存在であると言える。彼は自らの意思に従って、その行いの良し悪しは別としても論理的に事を進めていく登場人物なのである。

では反対に追い詰められていくティエステスの場合はどうであろうか。王位を奪いながらも現在は追放の身になっている彼にはどんな特徴が見られるのだろうか。一言でいえばティエステスには矛盾という特徴が挙げられる。彼を説明するのに分かりやすい場面を引用してみたい。

Thyestes

While I stood high in power, never did I cease to dread, yea, to fear the very sword upon my thigh, Oh, how good it is to stand in no man's road, care-free to eat one's bread, on the ground reclining! Crime enters not lowly homes, and in safety is

food taken at a slender board; poison is drunk from cups of gold. I speak that I do know: evil fortune is to be preferred to good. . . . (419)

通常、高位には安楽な生活が約束されているものだが、ティエステスには不安と心配というものが常につきまとう。高い身分にもかかわらず、精神面では下等な生活を余儀なくされていた。王位という力はアトレウスと異なり、自分の意思を妨げる力となってしまう。Amy R. Rose はアトレウスとティエステスについて“ Atreus and Thyestes are portrayed with respect to their different concepts of power ” (122)と権力に対して異なった態度を示しつつ、ティエステスを“ Only in a state of powerlessness has he found relief from the constant anxiety which attends the ruler ” (122)と述べ、権力がない方がティエステスにとっては安楽な境遇である事をはっきりと述べている。権力はティエステスにとっては不利に働くものであり、王位を黄金の羊を盗んで奪ったにもかかわらず、常にこれによって、自分が苦しめられていた。王位を求めておきながらも、それを手放してしまいたかったティエステスはまさに矛盾の存在と言える。

不当に奪った王位であるが、現在は追放になっているティエステスは、後にアトレウスの元に帰ることになる。追放の身では赤貧の状態が続くはずであるが、ティエステスはアトレウスの元に戻り、その彼が考える安楽な貧しさから脱することになる⁴。ここにもティエステスの矛盾は明らかである。David Kovacs は兄の元へ帰っていくティエステスについて“ Thyestes has abandoned his principles and adopted a middle course: no kingly power, but no penury either. He is undone by these half-measures ” (791)と述べている。権力を恐れて兄から逃げるティエステスは、追放者の赤貧状態から、兄の元へ帰ることで貧しさからは脱する。しかし、ティエステスは兄によって自身の息子を料理されて食べさせられるという復讐を受ける。赤貧状態からの脱出は、彼にとって不利に働く。彼は追放者の安楽さと考えていたにもかかわらず、結局兄の権力の元に帰る事になる。貧しさに対してもティエステスの態度は矛盾を伴う。つまり、貧しさを安楽さと考えていながらもそれを放棄し、貧しさを脱しながらも復讐を受けてしまう、という矛盾である。ティエステスを説明する矛盾はこうした事でも明らかである。

先に説明したようにアトレウスは王位と権力を自身の意図を実行するために必要な力と考えており、巨大な力によって事をなすという論理にかなっている状態である。

これに対してティエステスは上の説明で明らかなように矛盾の存在である。アトレウスの策略に屈するティエステスは、論理が矛盾をしのぐ結果と言える。この王権に対しての二人の態度の差は、国家が問題なのではなく、ティエステスの不貞による不当に奪われた王権という個人の恨みが重要な要素となっている。一連のアトレウスの復讐の本質は国家によるのではなく、個人の恨みであり、その恨みの犠牲になるのがティエステスである⁵。二人の王権という権力に対しての差異は国家ではなく、個人の行動が原因で起こる差異なのである。ティエステスが引き起こした不倫と金色の羊の盗みという個人の行動は、二人の兄弟に権力について差異を生じさせている。

結論

第1節では罰を受けるタンタルスは個人の罪が元であり、そしてその息子が王位につくのも料理されて神に提供されるという個の犠牲が元であった事、またティエステスが不当に金色の羊を奪い王位を手に入れたのもアトレウスの妻との不倫という個の行動が元であった事を示した⁶。王位や神といった絶対的権力は個が関係するという事を示した。そして第2節ではアトレウスとティエステスの王権に対しての態度の差を示して、王権という権力を恐れない場合でも恐れる場合でも、個人が重要でありアトレウスの復讐の本質は国家にあるのではなく個にある事、王権に対して論理性を示す者が矛盾を示す者を凌駕する様子は、個人が重要な要素になっている事を示した。本稿の目的は、作品が個人をテーマにしたものである事を証明し、その個人のテーマがどんな意味を持っているか、というのを明らかにする事であったが、ここでその問いに答えを出してみたい。

結局はアトレウスの元に戻ったティエステスであるが、策略により自分の息子を料理され、それを知らずに喜んで食べてしまう。ティエステスの息子は神々に自分の息子を料理して提供したタンタルスと同じ名前であるが、このアトレウスに料理されてしまうタンタルスと劇の発端の神からの罰を受けるタンタルスの同じ名前は、作品の円環的特徴を示しているようで興味深い。たしかに息子を料理して神に提供する側と料理されて食べられてしまう側という差異はあるが、食という観点で二つは繋がり、似たような様相を示している。アトレウスから、ティエステスが食べたものは自分の息子である事を告げられた彼は、“The gods will be present to avenge; to them for

punishment my prayers deliver thee ”(446)とアトレウスに答える。その言葉にアトレウスは“ To thy sons for punishment do I deliver thee ”(447)と答えてさらなる兄弟間の戦いが続くような劇の終わり方になっている。つまり、復讐に対するさらなる復讐という継続性が作品の最後で示されている。終わらない復讐である。Gary Meltzer は“ Atreus’ choice of the younger Tantalus for the honor of being first sacrificed reminds the reader of the inspirational debt Atreus owes to the spirit of father Tantalus ”(325)と説明しているが、この事も継続性を示すのに適切な意見ではないだろうか。

劇の起こりでタンタルスが受けているのは永遠の飢えと渇きという個の状態である。そして終わる事のない復讐の連鎖という、満たされない心の飢えと渇きの元には個の感情がある。今までの説明でこの作品が個人をテーマにしたものである、というのは十分に分かったであろうが、その個人のテーマの意味とは何かといえ、尽きる事のない心の不全感なのである。それは永遠の飢えや渇き、終わらない復讐にも重なり、それらの特徴を個によって表しているのである。これが本稿の出した答えである。

かつて英文科では第2外国語の他にもラテン文学の基礎を学ばせたという話を聞いているが、西洋文学全般に影響を及ぼしたラテン文学の重要性は今でも変わっていない。現代の大学カリキュラムの中でラテン語を組み込むのはもちろん無理ではあるが、セネカのような巨人の文学に多少なりとも関心が持たれるのは、英文学研究のみならず、西洋文学研究全般の発展にとっても意義があるのではないか。

註

1. 以下、『ティエステス』からの引用はセネカ作 Justes Miller 英訳の *Seneca's Complete Tragedies* 中の *Thyestes* に拠る。
2. 子羊は度々、生け贄の象徴として考えられる。ユダヤ教では過越の祭の生け贄であり、キリスト教では復活祭の生け贄である。キリストが子羊であり、十字架の上でその血が流される等、子羊の生け贄のイメージが度々登場する事になる。
3. 後の世に王権神授説という王権と神の権威を結びつける思想が出てくるが、アトレウスの王権を行使する力は、4世紀ごろ出てくる神寵帝理念の前例のように思える。自己の考えを絶対と考えるアトレウスには、王権神授説の根拠になったこの思想を見出せる。
4. ティエステスは先に挙げた長い引用で貧しさの安楽さを述べていたが、実際は王権の恐れを常を感じており、安楽さと恐れを切り離して考える事は出来ない。
5. 王権の行使そのものが国家を動かすものであり、国家的様相を持つものという議論が成り立つが、アトレウスは自分の意図のためには民の犠牲が伴う戦争も辞さないという態度をとっており、国家のためというよりは自己中心的性格が特徴的であるため、ここではアトレウスの場合、復讐を国家ではなく個の意図によるものとする。
6. 当然、不倫とは女にも罪があるはずだが、アトレウスの復讐の対象は、作品中ではティエステスのみである。ここに妻を制御できない自身の非という考えを避ける意図を読み込める。つまり、妻は制御できているが、その制御できている妻を不当に一方的に誘惑したのがティエステスであり、妻は自身の側にある、というアトレウスの考えである。

引用・参考文献

- Davis, P. J. . “ The Chorus in Seneca's Thyestes. ” *The Classical Quarterly* , 1989, Vol. 39, No. 2 (1989) , pp. 421-35. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/639385>.
- Erasmio, Mario. “ Enticing Tantalus in Seneca's Thyestes. ” *Materiali e discussioni per l'analisi dei testi classici* , 2006, No. 56 (2006), pp. 185-98. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/40236294>.
- Faber, Riemer A. . “ The Description of the Palace in Seneca "Thyestes" 641-82 and the Literary Unity of the Play. ” *Mnemosyne*, 2007, Fourth Series, Vol. 60, Fasc. 3 (2007), pp. 427-42. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/27736152>.
- Kovacs, David. “ Envy and "Akrasia" in Seneca's "Thyestes". ” *The Classical Quarterly* , Dec., 2007, New Series, Vol. 57, No. 2 (Dec., 2007), pp. 787-91. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/27564113>.
- Littlewood, Cedric. “ Seneca's Thyestes: The Tragedy with No Women?. ” *Materiali e discussioni per l'analisi dei testi classici* , 1997, No. 38 (1997), pp. 57-86. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/40236091>.
- Mader, Gottfried. “ Levels of Irony at Seneca, 'Thyestes' 929-933. ” *Hermes*, 2nd Qtr., 2002, 130. Bd., H. 2 (2nd Qtr., 2002), pp. 242-5. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/4477502>.
- Meltzer, Gary. “ Dark Wit and Black Humor in Seneca's Thyestes. ” *Transactions of the American Philological Association (1974-2014)* , 1988, Vol. 118 (1988), pp. 309-30. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/284174>.
- Poe, Joe Park. “ An Analysis of Seneca's Thyestes. ” *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* , 1969, Vol. 100 (1969), pp. 355-76. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/2935921>.
- Rose, Amy R. . “ Power and Powerlessness in Seneca's "Thyestes". ” *The Classical Journal* , Dec., 1986 - Jan., 1987, Vol. 82, No. 2 (Dec., 1986 - Jan., 1987), pp. 117-28. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/3297865>.
- Seneca, Lucius Annaeus. *Seneca's Complete Tragedies*. Translated by Justus Miller, 1917.

Smolennaars, J. J. L. “ THE VERGILIAN BACKGROUND OF SENECA'S "THYESTES"
641-82. ” *Vergilius (1959-)* , 1998, Vol. 44 (1998), pp. 51-65. *JSTOR*,
<https://www.jstor.org/stable/41587182>.